

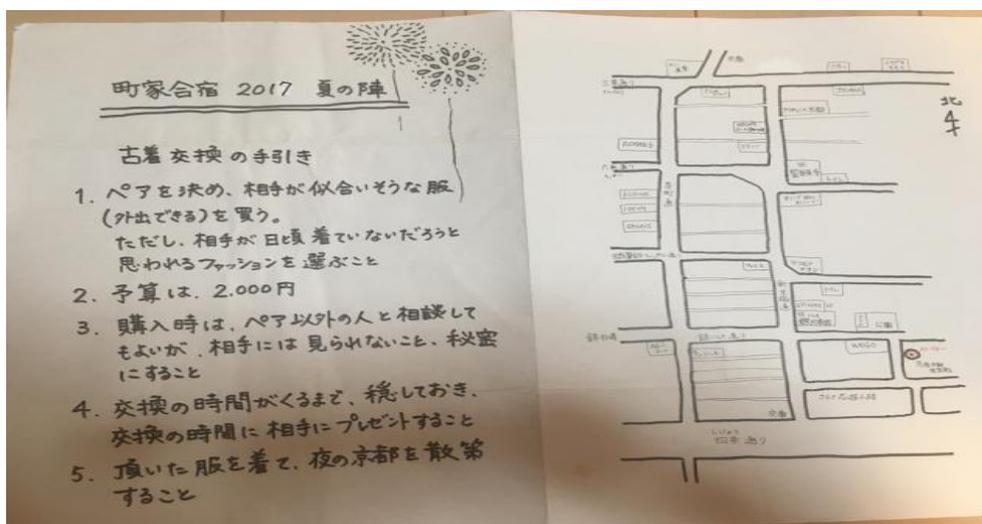
町家合宿 in 京都 Vol.13

～お金の使い方～

山下桂永子

「2000 円で洋服をコーディネートする。この時代、むちゃな。皆も高校生でお財布にお小遣いだって入っている。黙っていれば、インチキして 2000 円以上の洋服を用意することだって出来る。誰もインチキしなかった。ルール違反をしなかった。限られた中で、考えて動いて、自分の目的、欲求を達成する。これって、法律が張り巡った日本の社会で、自分のやりたいことを最大限に行うために、どうにか試行錯誤するのと一緒だなあと。気に入らないからといって、ルールは破れない。破っちゃいけない。欲求が叶わないからといって、怒らない。不貞腐れない。暴力を振るわない。落ちこまない。この力は、生きていく上で本当に必要な力なんじゃないか、と思いました。」

これは、10 年近く前にとあるスタッフが書いてくれた感想文の中で、町家合宿で行っている古着交換についての一部抜粋である。



☆古着交換でのお金の使い方

町家合宿では、参加者にお金（現金）を使ってもらう場面がいくつかある。古着交換はその1つで、2000円でペアになった相手の服を購入し、プレゼントするという取り組みである（vol.4参照）。

10数年前、消費税はまだ5%だったわけだが、それでも服を買うのに2000円以内で選ぶというのはなかなか至難の業である。感想文にあるように結構「むちゃ」である。特に全身コーディネートでなくても良いのだが、古着交換のルールには「相手が日頃着ていないだろうと思われる、そして似合うと思うファッションを選ぶこと」というのが条件に入っており、ガラッと相手のイメージを変えるためには、どうしてもTシャツだけとかスカートだけではインパクトは薄い。結果として全身コーディネートになるわけである。

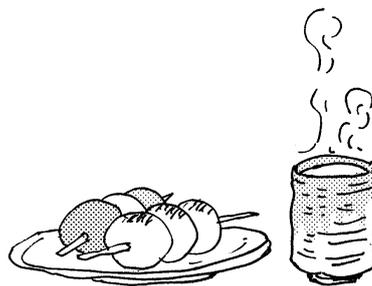
それでも、リピーターの参加者の中には、2000円以内できっちりと、上下の服はもちろんアクセサリーを加える猛者も現れる。この10数年の歴史の中で、参加者は誰も「インチキ」をしたことがない。

☆食事でのお金の使い方

町家合宿の食費は一食500円である。昼食は大学の学食で参加者に500円を渡し、それぞれ好きなものを食べてもらうことが多い。

初めての町家合宿参加者は、ここでもかなり苦勞をする。そんなに悩まなくてもいいのにとと思うぐらい悩む。その上、選んできたのはうどん一品だけで200円以上おつりを返してくれたりもする。私が「デザートでも飲み物でも買ってきていいんだよ」と言っても遠慮する子も多い。（ただ暑くて食欲がない子もいるが）

一方、リピーターの参加者は冒険者になる。量り売りのおかずやサラダバイキング、学食の中では高額な定食を選んで500円ギリギリまで攻める。私へのお釣りが2円などというときには、みんなで拍手喝采である。



☆「インチキ」するのは大人ばかり

感想文にもあるように、古着交換で参加者は一度も「インチキ」をしたことがない。むしろ一度だけ「インチキ」をしたのはなんとスタッフだった。この感想文の年ではなかったと思うが、ある年に学生ボランティアがスタッフとして入ってくれた時に、なんと自分の財布から数十円を足して服を買っていたのである。もちろん悪気はない、良かれと思ってやってくれたのだろう。中高生の参加者に比べたら大学生や大学院生にとって数十円は大した額ではないし、これぐらいいいだろうと思ったのかもしれない。それでもそれは「インチキ」なのである。みんなが平等に楽しむためのルールを破っているのである。

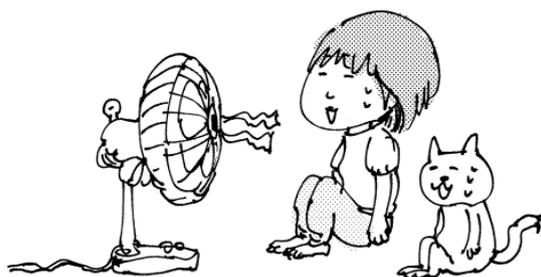
食事については、ある年の町家合宿で、インチキはなかったが、その瀬戸際になったことがある。500円を渡して昼食を買って席に着こうとした参加者の女の子が、何かにつかってお盆をひっくり返してしまい、昼食の中身を地面に落としてしまったのである。女の子は茫然と立ち尽くしてしまい、私は「大丈夫だよ、片付けたらまたおひるごはん買いに行こうね」ともう一度500円を渡そうとしていた。その時、片付けるための雑巾かモップを借りに行った町家合宿のスタッフと、学食の方が来て、学食の方は様子を見て「もう一度同じものを注文してください。お代はいりませんから」と言ってくださった。私は「いえいえ、それは申し訳ないのでちゃんとお支払いしますので」と伝えたのだが、学食の方は「大丈夫です、同じものを注文しに行ってください、レジのものにも伝えておきますから。ここも片付けておきますので」と慣れた様子でテキパキと動き始めた。学食がそもそも利益は度外視のサービスであるにせよ、しかも在学生でもない（かどうか見わけはつかないかもしれない）のになんと優しい素敵なサービスであろうかと感動した。

ということがあったのだが、私がしようとしたことはある意味、「500円以内で」というルールを違反するものであったかもしれない。

☆参加者のお金の使い方と大人（スタッフ）のお金の使い方

実感として思うのは、参加者のお金の使い方は、初心者は臆病で、リピーターになるとだんだんと大胆になっていくということである。では、大人（スタッフ）はどうかというと、その逆で最初は結構攻めるがだんだんと余裕をもって予算内に収まっていくということが多いように思う。

どちらも最初は、ルールの中でお金をうまく使えない（楽しめない）が、徐々にお金の使い方が上手になっていくという点では同じなのかもしれない。



☆お金の使い方は意識と練習が必要

私たちは普段なんとなく、簡単に無意識にお金に対して基本ルールを破る。子どもは親から「一つだけね」と言われて「うんわかった」と言ったのにお菓子を2個、買い物かごにいれようとするし、大人だってコンビニでご飯を買って少し予算オーバーだと思いながらデザートや雑誌を買ってしまったりする。

あらかじめの予算というルールを破っても今の自分の欲求を優先してしまうのである。大人の場合は自分のお金だからそれで損をしても自分のせいだからいいという考えもあるが、それは自分がルールを破ることにに対してやはり意識を持てているかどうかは大事だと思う。そしてルールをできるだけ破らないように創意工夫ができているかも大事だと思う。

子どもならば、二つ欲しいなら嫌々1個返してくるだけでなく、安いものにするから2個にしてほしいと親と交渉する技術を身に付けていくのもよいし、家でお手伝いをしたら、次に来的时候は2個買ってほしいというルールを提案してもよい。

大人ならば、コンビニでデザートや雑誌を優先したいなら、ご飯は家で炊く、おかずは自分で作るなどしてみるのもよい。

そうやって、お金を使うことに対して意識して創意工夫することは、子どもでも大人でもやれることだし、練習というか体験も必要なことなのだろう。そしてこれは、冒頭の感想文にもあるように生きていくうえで必要な力である。町家合宿で行っていることは、お金の使い方の練習でもあるのだと最近思っている。

